石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第312号　平成21年10月1日発行

国宝 久隅守景 納涼図　東京国立博物館蔵
Image : TMN Image Archives　Source : http : //TmnArchives.jp/

石川県立美術館開設50周年記念

久隅守景展　－加賀で開花した江戸の画家－

- 特別陳列　絵画の展開　～室町から江戸～　－久隅守景の背景－　前田育徳会尊経閣文庫分館
- 特別陳列　狩野派の誕生　－久隅守景の背景－　第2展示室
- 特別陳列　動物彫刻　－動物の造形と人－　第4展示室
- 特集展示　九谷の色　第5展示室

- 展覧会回顧
- 行事予定
- 所蔵品紹介

石川県立美術館開設50周年記念

久隅守景展

－加賀で開花した江戸の画家－

主催／石川県立美術館
共催／NHK金沢放送局　　芸術文化振興基金助成事業

平成21年9月26日（土）～10月25日（日）会期中無休

久隅守景は江戸画壇の頂点にあった幕府御用絵師、狩野探幽門下の傑出した画家として知られ、十七世紀後半に少なくとも二度加賀の地を訪れ、納涼図や一連の四季耕作図などの名作を描いたと考えられています。当時の加賀藩は、文化政策で徳川幕府に優越しようとの気概をもって名工の招聘や名品の蒐集に意欲的に取り組んでいました。「探幽門下その右に出る者無し」と高く技量を評価されていた守景ですが、後年何らかの確執があってその門を去りました。そこで加賀藩の文化風土が守景の気骨と絶妙に響き合い、守景は加賀の地で画業を開花させることができたのではないでしょうか。

本格的な久隅守景の回顧展としては最初ともいえる本展では、国宝《納涼図》（東京国立博物館蔵）をはじめ、守景作品で指定されている国宝一点、重要文化財三点すべてを含む初期から晩年の主要作品約四十点を展示し、渋いながらも日本人の心の琴線にふれる高い精神性を打ち出していった画業の歩みをたどります。

主な展示作品

国宝「納涼図」東京国立博物館蔵
重文「四季耕作図」京都国立博物館蔵
重文「加茂競馬・宇治茶摘図」大倉集古館蔵
※九月二十六日～十月十日まで展示
「鷹狩図」日東紡績株式会社蔵

〔観覧料〕

一般一〇〇〇円（八〇〇円）
大学生六〇〇円（五〇〇円）
高中小生三〇〇円（二〇〇円）
（　）は二十名以上の団体料金

菊慈童図（部分）

1F 企画展示室

学芸員の眼

「謎の絵師」というと何やら秘密めいた響きがしますが、作家の知名度や伝世作品の数に較べて作者その人の情報が極めて少ない点で、久隅守景は第一級の「謎の絵師」でしょう。ここ数十年来久隅守景を単独で取り上げた展覧会が開催されていないため、初の本格的回顧展といえる本展では、代表作を一堂に展示することによって「謎」の背景に少しでも迫ってみたいと思います。今回特に注目していただきたいのは、守景の画業が中国山水画展開の底流にあった道教や儒教思想に対する、鋭い洞察の上に展開していることです。江戸時代にはいり、幕府は儒教的な統制を強化しましたが、守景の儒教観はそれとは少し異なるようです。そしてそこには加賀藩の文化風土も大きく作用しています。

◆講演会（聴講無料）

「夕顔棚納涼図
―描かれた追憶の家族」
講師／松嶋雅人氏
（東京国立博物館特別展室長）
日時／九月二十七日（日）
午後一時三〇分
会場／石川県立美術館ホール

◆土曜講座（聴講無料）

「狩野探幽と久隅守景」
講師／嶋崎　丞
（石川県立美術館長）
日時／十月十日
午後一時三〇分
「納涼図への道」
講師／村瀬博春
（石川県立美術館学芸専門員）
日時／十月十七日
午後一時三〇分
会場／石川県立美術館講義室
（両日共）

◆ギャラリートーク

（展覧会観覧料が必要です）
十月中の毎週土、日曜日
午前十一時から
（三、四、十、十一、十七、十八、二十四、二十五日）

学芸員の眼

前田育徳会尊経閣文庫分館

絵画の展開 ～室町から江戸～
－久隅守景の背景－

平成21年9月26日（土）～10月25日（日）会期中無休

重文 伝雪舟　四季花鳥図（部分）

日本の絵画は、中世末期から近世初期の時代に、新たな建築様式である書院造の出現によって大きな展開を見せます。書院は応接、居住という表向き、内向きの機能を持った座敷空間を構成した建築であり、それぞれの空間には位置による序列と意義付けがなされました。空間を仕切る襖や屏風に描かれる絵としての障屏画には、そうした目に見えない秩序を可視化する媒体としての役割があり、能楽や茶の湯など特に室町時代における諸芸道の発達や座敷飾りの盛行によって、その機能はますます強化され、桃山時代から江戸時代初期にかけて量的、質的に目を見張る進化を遂げます。

今回の展示は、そうした展開の一端をご紹介するものです。まず、王若水の《花鳥図》は、中国の伝統的な吉祥図としての花鳥画が中世期にどのように描かれ、日本にどのような形でもたらされたのかを知る貴重な手掛かりといえます。同時に展示される伝雪舟の《四季花鳥図》（重文）と比較すると、雪舟が中国的な画題をどのように消化していったのかを知ることができます。さらに雪舟の師とされる周文の筆と狩野探幽が記している《四季山水図》（重文）も、中国画題が和様化されてゆく初期の過程を知る上で興味深い作品です。今回はこれらの作品をとおして、久隅守景の画業に見られる漢画系画題の和様化が、室町時代からの大きな流れの最終局面に位置付けられることを再認識していただければ幸いです。また、六代梅田九栄の《鷹狩図》もあわせて展示します。「久隅守景展」に展示される《鷹狩図》（日東紡績株式会社蔵）との比較も楽しみな見所です。

「久隅守景の背景」と銘打った今回の特集、何よりもまず元時代の花鳥画、周文の山水図、雪舟の大画面の花鳥図にご注目いただきたいと思います。狩野派の門人として久隅守景はこうした作品の実物あるいは粉本に接し、画面の構成や個々の描写を学んでいったと考えることができます。中国や日本の絵画の中心的な画題だった山水や花鳥の表現が、十五世紀に一つの到達点に至ります。そこで、その表現世界をどのように翻案してゆくかが、江戸時代の画家の課題でした。本展を「久隅守景展」とあわせてご鑑賞いただくことによって、守景の画業がどのように深化していったかをご理解いただけることと思います。

第2展示室

学芸員の眼

狩野探幽門下の傑出した画家として名を馳せた久隅守景の画業をふりかえる上で、狩野派の展開を無視することはできません。今回は、前田育徳会尊經閣文庫分館の特集において狩野派の画風形成に大きな影響を与えた中国や日本の作品を紹介します。そこてこの特別陳列では、雪舟以降の狩野派の形成・展開の軌跡をご覧いただきたいと思います。特に山水、花鳥の画題をどのように消化していったかという点は、今回の大きな見所でもあり、その延長線上に久隅守景の画業における伝統と創造の側面が明確となってきます。室町から桃山を経て江戸時代に至る十六～十七世紀は、日本絵画の黄金時代ということができます。その一端をご堪能いただければと思います。

狩野派の誕生

－久隅守景の背景－

平成21年9月26日（土）～10月25日（日）会期中無休

室町時代にはいり公武の殿邸や寺院が新たに多数造営されるのにともない、障屏画の需要も急速に高まり、注文を迅速・確実にこなす高い技量を保持した作家集団が注目されるようになりました。狩野派はその典型であり、対応する画題は中世以来の山水、花鳥、人物に加えて走獣、当世風俗など多岐にわたり、描法も真体、行体、草体や漢画調、やまと絵調を自在にこなし、大画面のみならず、掛幅や絵巻、扇面、絵馬などあらゆる需要に応じました。

今回の特別陳列は、館蔵品、寄託品により狩野派の誕生と江戸時代初期の展開を概観します。狩野派は、広範囲の注文に的確に応えるために室町時代に高い評価を得ていた作品の画様や画体に習熟してゆきます。後年、そのような制作方法が粉本主義との批判を受けますが、それぞれの画家も創意工夫につとめています。今回の展示作品では秋月等観の《西湖図》（重文）が、狩野派内においてどのように継承され、変容していったかを元信、探幽の作品との比較によって確認することができます。その他花鳥や人物など、基本的な画題の取り扱いも、やはり狩野派ならではの表現が認められます。

「久隅守景の背景」の副題から、今回は二つの《四季耕作図》も展示されます。このうち大乗寺の所蔵品は、守景とは逆に、やまと絵の伝統を漢画的な表現に翻案している点が注目されます。また狩野即誉の作品は、守景の様式を意識しつつも、狩野派の伝統的な表現を基調としています。「久隅守景展」とあわせてご鑑賞いただくことにより、狩野派の流れの中で、守景がどのように独自性を打ち出していったかを、さらに深くご理解いただけることと思います。

重文 秋月等観　西湖図

第4展示室

動物彫刻 ～動物の造形と人～

平成21年9月26日（土）～10月25日（日）会期中無休

長谷川八十　軍鶏

動物をテーマとする美術造形では、「動物美術」とでも称すべき小ジャンルが成立するほど多彩な展開がみえるものとなっています。そこでは主に動物そのものをモチーフとした造形と、人と動物の係わりのなかにおいて造形化されたものとに大きく分かれるようです。

本展では近代以降の彫刻作品の中から、様々な動物彫刻をご覧いただきます。第一部では様々な動物をモチーフとした立体造形を眺めるもので、各動物独自のフォルムの面白さや造形美の表現を試みた動物彫刻作品を眺めます。また第二部では、動物と人間及び、人間の生活・社会との係わりの中で見られる人と動物が組み合わさってできる動物彫刻をご覧いただきます。

第一部「動物彫刻の美　～フォルムと表情」の「身近な動物」コーナーは、犬や猿など身近な動物の愛くるしい表情を捉えた作品が中心です。「動きを捉えて」コーナーは主に、自然界や動物園などでみる動物を中心に、各動物独自のフォルムと一瞬の動きを巧みに捉えた造形が中心です。「動物の造形」では各動物をモチーフとして各作家が様々な表現を試みた動物彫刻をご覧下さい。

第二部「人と動物～動物造形にみる人の暮らしと文化」の「動物のいる風景」コーナーでは生活の中での人と動物の多様な係わりを眺めます。「祈りと動物」では宗教美術を中心に登場する空想上の動物を含めた展示です。「動物と物語」は動物が登場する物語の一場面や動物に係るロマンある造形をご覧いただきます。「沼田一雅と動物陶彫」コーナーは彫刻家であり、また我が国近代陶彫の創始者であった沼田一雅の作品をお楽しみいただくものです。

学芸員の眼

動物を象った作品は古くから見え、絵画や彫刻のほか工芸品の装飾としても多彩な展開が見えます。また表される動物の種類や表現は、各民族や居住する自然・生活環境、歴史・文化・宗教の影響を色濃く反映しています。動物の造形とは人との係わりの中で表されて来たものといえましょう。しかしルネサンス以降、自然主義の復興とともに自然科学が発展し、大航海時代には新たな動植物が紹介されると動物の表現は、それまでの固定的・象徴的なものから科学的でリアルな表現へと変化が見えるようになり、新たに動物造形のジャンルが興りました。動物造形は狩猟や乗馬など限られたテーマのものからペットを含めた新たな表現としての展開が見られるようになります。

近代日本美術の精華

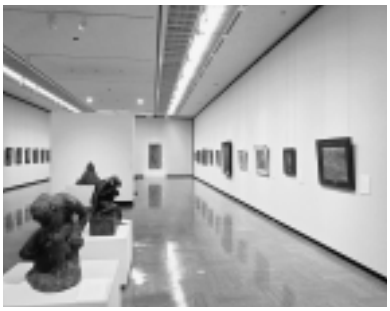
展覧会回顧

本展は、東京藝術大学大学美術館のコレクション八十九点に、当館の所蔵品十一点を加えた、計百点の作品で展示構成しました。作品の選定にあたっては、単なる藝大コレクションの名品展ではなく、石川と現在の東京藝術大学の前身である東京美術学校のつながりという点に主眼を置きました。具体的には、明治後半から昭和前期にかけて、多くの石川県人が美校に学んでいるのですが、そうした郷土ゆかりの美校出身者やその師の力作を一堂に会することによって、当時の石川の美術振興の推進役を果たした芸術家たちの存在を再認識しようと企画したものです。

出品作品の中には卒業制作も多く含まれ、それらは作家の若き日のみずみずしい感性を示し、高い技量を発揮した秀作も少なからずありました。

また、本展に華を添える意味で出品された、重文《不動明王》(狩野芳崖作)は近代日本画の初頭を飾る名作であり、重文《鮭》(高橋由一作)はわが国の油彩画の歴史を語る上で重要な作品、また重文《収穫》(浅井忠作)は明治期洋画壇の脂派を代表する作品という、近代日本美術史を語る上で欠くことのできないものばかりです。さらに、めったに外部で展示することのない国宝《絵因果経》を特別出品していただいたことは、展覧会開催の意義をさらに深めることになりました。

ともあれ、今回の展覧会開催にあたっては、藝大美術館の方々に、多大なご協力をいただきました。改めて感謝申し上げるとともに、本展の鑑賞のために足をお運び下さった方々に、厚くお礼申し上げます。



近代日本美術の精華 展示風景

第5展示室

特集「九谷の色」

平成21年9月26日(土)～10月25日(日)
会期中無休

全国にその名を知られる九谷焼は、江戸時代前期に制作された、いわゆる古九谷がその源流であるということができます。加賀江沼の九谷の地で最初につくられたことから、以来、今日まで続く石川県南部のやきものを総称して九谷焼と呼んでいます。古九谷廃窯のあとは、金沢・能美・小松・加賀などさまざまな窯で焼かれ、表現も多様化していくのですが、黄・青・緑・赤・紫のいわゆる五彩を中心とする釉薬を駆使した色絵磁器としての特徴は、現代も受け継がれています。

明治以降、九谷の特徴を活かしながら多くの陶工が活躍していきます。たとえば、明治期の名工といえる松本佐平や初代須田菁華は、古九谷を写しその技術を学んで自己の作風の創造に反映させました。初代徳田八十吉は、とくに古九谷の重厚な釉薬の調合技法について研究し、独自の「深厚釉」を開発しました。その後三代徳田八十吉は、「彩釉」という色釉の濃淡で表現する作風を生み出して、斬新な感性を示しています。また、初代八十吉に学んだ二代浅蔵五十吉は、線彫りや陶彫りを行って彩色した「刻彩」に加え、従来からの色釉に一層の工夫を重ね、「浅蔵カラー」と呼ばれる独特の深くて渋い色絵の世界を築きあげました。一方、昭和初期に色絵磁器の研究のため北出塔次郎の窯で作陶を行った近代陶芸の巨匠・富本憲吉は、当時の九谷陶芸界に大きな刺激を与え、塔次郎も多大な薫陶を受けて、新しい九谷の色絵世界を確立しました。そして塔次郎に学んだ北出不二雄は、九谷の伝統に学んだ深い色調のものから、現代風な明るい色釉に展開させたものまで幅広い作風を見せていくことになります。

本展では、明治から現代に至る九谷焼を代表する作家の作品二十点を展示し、あらためて九谷の持ち味である「色」に注目していただきたいと思います。

なお、同展示室において、古九谷の名品十四点を合わせて展示しますので、近現代の九谷と見くらべてその伝統と創造をご覧いただければ幸いです。

松本佐平
色絵鶴かるた文古九谷写平鉢

初代徳田八十吉
色絵山水図大鉢

参加者募集

第40回文化財現地見学旅行

「空間をたのしむ　ー京都の庭園、障屏画ー」

■期日／平成二十一年十月十七日(土)～十八日(日)一泊二日
■集合／十七日朝七時、金沢駅西口集合
（十八日午後七時頃に帰着予定）
■参加代金／会員・二万四千円、会員外・二万五千円
■見学地
【妙喜庵「待庵」（国宝）茶室】千利休作の現存する唯一の茶室（国宝）。たった二畳の極小空間に凝縮された、利休の美意識をご堪能下さい。
【大山崎町歴史資料館】茶室「待庵」の原寸大模型を展示。学芸員の方より待庵と特別展「秀頼と大山崎町」についての解説を受けます。
【アサヒビール大山崎山荘美術館】イギリスのチューダー様式をもとに建てた大正・昭和期の山荘。近年、修復整備し、美術館として復活。安藤忠雄設計の新館にはモネの睡蓮を展示しています。
【元離宮二条城】桃山時代を代表する豪壮な空間芸術。保存のため御殿の障壁画は模写ですが往時の威容は十分偲ばれます。特別に学芸員の方に収蔵館の実物障壁画や御殿を案内して貰います。
【南禅寺金地院】小堀遠州の作として名高い鶴亀の庭と茶室「八窓席」。そして、あの長谷川等伯筆の「猿猴捉月図」が書院で襖のままみられます。
【北村美術館「四君子苑」】一般公開にさきがけ、数寄者、北村謹次郎氏の茶苑を、美術館の特別展「秋興の茶」とあわせておたのしみください。何気なく置かれた石塔から襖の引き手まで、その空間、見過ごせない物ばかりです。
◆申込み方法
往復はがきに「文化財現地見学」希望と明記し、氏名・年齢・性別・郵便番号・ご住所・お電話番号・会員番号を記入の上、ご応募ください。※応募者多数の場合、抽選になります。
◆宛先
〒九二〇ー〇九六三
金沢市出羽町二ー一　石川県立美術館「文化財現地見学」係
◆平成二十一年十月六日(火)必着。締め切りまで日があまりございませんのでご注意ください。
※行程に徒歩による移動や急な坂道が含まれます。脚に自信のない方はご遠慮下さい。

10月の行事予定

■土曜講座　美術館講義室　十三時三〇分～　聴講無料

10日(土)	「狩野探幽と久隅守景」	講師／嶋崎　丞　館長
17日(土)	「納涼図への道」	講師／村瀬博春　学芸専門員

■ビデオ上映会　美術館ホール　十三時三〇分～　入場無料

11日(日)	「水墨大全　4　日本的装飾美の誕生　狩野派」	(60分)
18日(日)	「水墨大全　6　琳派と江戸前期の風俗画」	(60分)
25日(日)	「日本美術史　江戸時代の絵画」	(28分)

兼六園周辺文化の森　ミュージアムウィーク

十月一日から八日間、美術館、歴史博物館、四高記念文化交流館をはじめとする兼六園周辺文化の森にある施設では、今年もミュージアムウィークを開催します。
特別講演会、ミュージアムコンサートのほか食談や伝統芸能、ミュージアムガーデンなど様々なイベントが企画されています。文化の森クイズやスタンプラリーもあります。芸術・文化の香りに包まれる一週間、美術館では「久隅守景展」も開催中です。ぜひ文化の森へ足をお運び下さい。

キッズプログラム「動物がいっぱい」

■日時／十月十一日十三時三〇分～
■会場／講義室集合
■参加無料
特別陳列「動物彫刻」にあわせた小学生向け鑑賞プログラムです。申し込み不要です。当日開始時間までに会場におこしください。みんなで動物彫刻を楽しもう！

日溜り　ひだまり　昭和26年　1951年

所蔵品紹介201

吉田　三郎　よしださぶろう　明治22年(1889)～昭和39年(1964)

作者の吉田三郎は、本県を代表する彫刻家の一人で主に官展で活躍しました。初期の代表作である「老抗夫」に始まり晩年の「波」に至る雄渾な男性像制作が有名であり、また卓越した写実技法で数多くの首・胸像制作でも鳴らし、さらにこのような多くの小動物彫刻制作もこなしました。この作品は、老猿がひなたぼっこをしていると思われるような様子を捉えた作品で、ひなたで寛ぐ安堵の表情を見事に表し、一方、こけた頬や彫の深い筋肉などにみる濃い影には年老いた猿の年輪が滲み出て深い味わいのある作品となっています。作品は大まかなタッチながら毛皮の感じを残して面が強く、メリハリが利いた歯切れのよい作品となっています。猿のモチーフは、七面鳥や駝鳥・兎などと並び幅広く様々な動物彫刻制作を行った吉田三郎にとっても得意としたものであったようで、パターンを替えた作品が見られるものとなっており、猿の特徴を端的に捉え表情豊かな作品となっています。昭和二十六年第七回日展出品。

（本品は、二階コレクション展示第四展示室特別陳列「動物彫刻」でご覧いただけます。）

ミュージアムショップ通信

久隅守景展図録
予価2,000円

今回はいよいよ開催される、久隅守景展の図録を紹介します。本展は本格的な守景の回顧展としては、初めてといえるものです。その意味から、国宝「納涼図」を含む出品作品がすべてオールカラーで掲載される本展の図録は、資料としても貴重な物になります。売り切れも予想されます。この機会をお見逃しなく！

次回の展覧会

コレクション展示室	企画展示室
前田家の渡来織物好み	第56回日本伝統工芸展金沢展 10月30日(金)～11月8日(日)
石川県の名宝 －国宝・重文・県文－	再興第94回院展金沢展 11月12日(木)～11月25日(水)
1950年代、日本画のうけた風	
会期：10月29日(木) ～11月25日(水)	

10月の休館日は
26日(月)～28日(水)です。

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　350円(280円)
大学生　280円(220円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金

今月の展示室開館時間
午前9:30～午後6:00
カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00

石川県立美術館だより　第312号
2009年10月1日発行〈毎月発行〉
〒920-0963 金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580　Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/